猫の事務所

……ある小さな官衙に関する幻想……

宮沢賢治

軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。

書記はみな、短い黒の繻子(しゅす)の服を着て、それに大へんみんなに尊敬されましたから、何かの都合で書記をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれもどれも、みんなそのあとへ入りたがってばたばたしました。

けれども、この事務所の書記の数はいつもただ四人ときまってゐましたから、その沢山の中で一番字がうまく詩の読めるものが、一人やっとえらばれるだけでした。

事務長は大きな黒猫で、少しもうろくしてはゐましたが、眼などは中に銅線が幾重も張つてあるかのやうに、じつに立派にできてゐました。

さてその部下の

一番書記は白猫でした、

二番書記は虎猫（とらねこ）でした、

三番書記は三毛猫でした、

四番書記は竈猫（かまねこ）でした。

竈猫といふのは、これは生れ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはひつてねむる癖があるために、いつでもからだが煤（すす）で

きたなく、殊に鼻と耳にはまつくろにすみがついて、何だか狸(たぬき)のやうな猫のことを云(い)ふのです。

ですからかま猫はほかの猫には嫌はれます。けれどもこの事務所では、何せ事務長が黒猫なもんですから、このかま猫も、あたり前ならいくら勉強ができても、とても書記なんかになれない筈(はず)のを、四十人の中からえらびだされたのです。

大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫が、まつ赤な羅紗(らしや)をかけた卓(テーブル)を控へてどつかり腰かけ、その右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にして、

きちんと椅子（いす）にかけてゐました。

ところで猫に、 地理だの歴史だの何になるかと云ひますと、

まあこんな風です。

事務所の扉（と）をこつこつ叩（たた）くものがあります。

「はひれつ。」事務長の黒猫が、ポケツトに手を入れてふんぞりかへつてどなりました。

四人の書記は下を向いていそがしさうに帳面をしらべてゐます。

ぜいたく猫がはひつて来ました。

「何の用だ。」事務長が云ひます。

「わしは氷河鼠（ひょうがねずみ）を食ひにベーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだらう。」
「うん、一番書記、氷河鼠の産地を云へ。」
一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答へました。
「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ河流域であります。」
事務長はぜいたく猫に云ひました。
「ウステラゴメナ、ノバ………何と云つたかな。」
「ノバスカイヤ。」一番書記とぜいたく猫がいつしよに云ひました。

「さう、ノバスカイヤ、それから何！？」

「フサ川。」またぜいたく猫が一番書記といつしよに云つたので、事務長は少しきまり悪さうでした。

「さうさう、フサ川。まああそこらがいいだらうな。」

「で旅行についての注意はどんなものだらう。」

「うん、二番書記、ベーリング地方旅行の注意を述べよ。」

「はつ。」二番書記はじぶんの帳面を繰りました。「夏猫は全然旅行に適せず」するとどういふわけか、この時みんながかま猫の方をじろつと見ました。

「冬猫もまた細心の注意を要す。函館（はこだて）付近、馬肉にて

釣らるる危険あり。特に黒猫は充分に猫なることを表示しつつ旅行するに非（あらざ）れば、応々黒狐（くろぎつね）と誤認せられ、本気にて追跡さるることあり。」

「よし、いまの通りだ。貴殿は我輩のやうに黒猫ではないから、まぁ大した心配はあるまい。函館で馬肉を警戒するぐらゐのところだ。」

「さう、で、向ふでの有力者はどんなものだらう。」

「三番書記、ベーリング地方有力者の名称を挙げよ。」

「はい、えゝと、ベーリング地方と、はい、トバスキー、ゲンゾスキー、二名であります。」

「トバスキーとゲンゾスキーといふのは、どういふや

うなやつらかな。」

「四番書記、トバスキーとゲンゾスキーについて大略を述べよ。」

「はい。」四番書記のかま猫は、もう大原簿のトバスキーとゲンゾスキーとのところに、みじかい手を一本づつ入れて待つてゐました。そこで事務長もぜいたく猫も、大へん感服したらしいのでした。

ところがほかの三人の書記は、いかにも馬鹿（ばか）にしたやうに横目で見て、ヘツとわらつてゐました。かま猫は一生けん命帳面を読みあげました。

「トバスキー酋長（しうちやう）、徳望あり。眼光炯々（けいけい）たるも物を

言ふこと少しく遅し、ゲンゾスキー財産家、物を言ふこと少しく遅けれども眼光炯々たり。」

「いや、それでわかりました。ありがたう。」

ぜいたく猫は出て行きました。

こんな工合(ぐあひ)で、猫にはまあ便利なものでした。ところが今のおはなしからちやうど半年ばかりたつたとき、たうとうこの第六事務所が廃止になつてしまひました。といふわけは、もうみなさんもお気づきでせうが、四番書記のかま猫は、上の方の三人の書記からひどく憎まれてゐましたし、ことに三番書記の三毛猫は、このかま猫の仕事をじぶんがやつて見たくてたまらなくな

つたのです。かま猫は、何とかみんなによく思はれようといろいろ工夫をしましたが、どうもかへっていけませんでした。

　たとへば、ある日となりの虎猫（とらねこ）が、ひるのべんたうを、机の上に出してたべはじめようとしたときに、急にあくびに襲はれました。

　そこで虎猫は、みじかい両手をあらんかぎり高く延ばして、ずゐぶん大きなあくびをやりました。これは猫仲間では、目上の人にも無礼なことでも何でもなく、人ならばまづ鬚（ひげ）でもひねるぐらゐのところですから、それはかまひませんけれども、いけないことは、足を

ふんばつたために、テーブルが少し坂になつて、べんたうばこがするするつと滑つて、たうとうがたつと事務長の前の床に落ちてしまつたのです。それはでこぼこではありましたが、アルミニユームでできてゐましたから、大丈夫こはれませんでした。そこで虎猫は急いであくびを切り上げて、机の上から手をのばして、それを取らうとしましたが、やつと手がかかるかかからないか位なので、べんたうばこは、あつちへ行つたりこつちへ寄つたり、なかなかうまくつかまりませんでした。

「君、だめだよ。とどかないよ。」と事務長の黒猫が、

もしやもしやパンを喰べながら笑つて云ひました。その時四番書記のかま猫も、ちやうどべんたうの蓋(ふた)を開いたところでしたが、それを見てすばやく立つて、弁当を拾つて虎猫に渡さうとしました。ところが虎猫は急にひどく怒り出して、折角かま猫の出した弁当も受け取らず、手をうしろに廻して、自暴(やけ)にからだを振りながらどなりました。

「何だい。君は僕にこの弁当を喰べろといふのかい。机から床の上へ落ちた弁当を君は僕に喰へといふのかい。」

「いいえ、あなたが拾はうとなさるもんですから、拾

つてあげただけでございます。」
「いつ僕が拾はうとしたんだ。うん。僕はただそれが事務長さんの前に落ちてぁんまり失礼なもんだから、僕の机の下へ押し込まうと思つたんだ。」
「さうですか。私はまた、あんまり弁当があつちこつち動くもんですから……………」
「何だと失敬な。決闘を………」
「ジヤラジヤラジヤラジヤラジヤラン。」事務長が高くどなりました。これは決闘をしろと云つてしまはせない為に、わざと邪魔をしたのです。
「いや、喧嘩するのはよしたまへ。かま猫君も虎猫君

に喰べさせようといふんで拾つたんぢやなからう。それから今朝云ふのを忘れたが虎猫君は月給が十銭あがつたよ。」

虎猫は、はじめは恐(こは)い顔をしてそれでも頭を下げて聴いてゐましたが、たうとう、よろこんで笑ひ出しました。

「どうもおさわがせいたしましてお申しわけございません。」それからとなりのかま猫をじろつと見て腰掛けました。

みなさんぼくはかま猫に同情します。

それから又五六日たつて、丁度これに似たことが起

つたのです。こんなことがたびたび起るわけは、一つは猫どもの無精なたちと、も一つは猫の前あし即(すなは)ち手が、あんまり短いためです。今度は向ふの三番書記の三毛猫が、朝仕事を始める前に、筆がポロポロころがつて、たうとう床に落ちました。三毛猫はすぐ立てばいいのを、骨惜みして早速前に虎猫(とらねこ)のやつた通り、両手を机越しに延ばして、それを拾ひ上げようとしました。今度もやつぱり届きません。三毛猫は殊にせいが低かつたので、だんだん乗り出して、たうとう足が腰掛けからはなれてしまひました。かま猫は拾つてやらうかやるまいか、この前のこともありますので、し

ばらくためらつて眼をパチパチさせて居ましたが、たうとう見るに見兼ねて、立ちあがりました。

ところが丁度この時に、三毛猫はあんまり乗り出し過ぎてガタンとひつくり返つてひどく頭をついて机から落ちました。それが大分ひどい音でしたから、事務長の黒猫もびつくりして立ちあがつて、うしろの棚から、気付けのアンモニア水の瓶（びん）を取りました。ところが三毛猫はすぐ起き上つて、かんしやくまぎれにいきなり、

「かま猫、きさまはよくも僕を押しのめしたな。」とどなりました。

今度はしかし、事務長がすぐ三毛猫をなだめました。

「いや、三毛君。それは君のまちがひだよ。かま猫君は好意でちよつと立つただけだ、君にさはりも何もしない。しかしまぁ、こんな小さなことは、なんでもありやしないぢやないか。さあ、えゝとサントンタンの転居届けと。えゝ。」事務長はさつさと仕事にかかりました。そこで三毛猫も、仕方なく、仕事にかかりはじめましたがやつぱりたびたびこはい目をしてかま猫を見てゐました。

こんな工合（ぐあひ）ですからかま猫はじつにつらいのでした。

かま猫はあたりまへの猫にならうと何べん窓の外に

ねて見ましたが、どうしても夜中に寒くてくしやみが出てたまらないので、やつぱり仕方なく竈（かまど）のなかに入るのでした。

なぜそんなに寒くなるかといふのに皮がうすいためで、なぜ皮が薄いかといふのに、それは土用に生れたからです。やつぱり僕が悪いんだ、仕方ないなあと、かま猫は考へて、なみだをまん円な眼一杯にためました。

けれども事務長さんがあんなに親切にして下さる、それにかま猫仲間のみんながあんなに僕の事務所に居るのを名誉に思つてよろこぶのだ、どんなにつらくて

もぼくはやめないぞ、きつとこらへるぞと、かゝ猫は泣きながら、にぎりこぶしを握りました。

　ところがその事務長も、あてにならなくなりました。それは猫なんていふものは、賢いやうでばかなものです。ある時、かゝ猫は運わるく風邪（かぜ）を引いて、足のつけねを椀（わん）のやうに腫（は）らし、どうしても歩けませんでしたから、たうとう一日やすんでしまひました。かゝ猫のもがきやうといつたらありません。泣いて泣いて泣きました。納屋の小さな窓から射（さ）し込んで来る黄いろな光をながめながら、一日一杯眼をこすつて泣いてゐました。

その間に事務所ではかういふ風でした。

「はてな、今日はかま猫君がまだ来んね。遅いね。」と事務長が、仕事のたえ間に云ひました。

「なあに、海岸へでも遊びに行つたんでせう。」白猫が云ひました。

「いゝやどこかの宴会にでも呼ばれて行つたらう」

虎猫(とらねこ)が云ひました。

「今日どこかに宴会があるか。」事務長はびつくりしてたづねました。猫の宴会に自分の呼ばれないものなどある筈(はず)はないと思つたのです。

「何でも北の方で開校式があるとか云ひましたよ。」

「さうか。」黒猫はだまつて考へ込みました。

「どうしてどうしてかま猫は、」三毛猫が云ひ出しました。「この頃（ごろ）はあちこちへ呼ばれてゐるよ。何でもこんどは、おれが事務長になるとか云つてるさうだ。だから馬鹿（ばか）なやつらがこはがつてあらんかぎりご機嫌（きげん）をとるのだ。」

「本たうかい。それは。」黒猫がどなりました。

「本たうですとも。お調べになつてごらんなさい。」

三毛猫が口を尖（とがら）せて云ひました。

「けしからん。あいつはおれはよほど目をかけてやつてあるのだ。よし。おれにも考へがある。」

そして事務所はしばらくしんとしました。

さて次の日です。

かま猫は、やつと足のはれが、ひいたので、よろこんで朝早く、ごうごう風の吹くなかを事務所へ来ました。するといつも来るとすぐ表紙を撫(な)でて見るほど大切な自分の原簿が、自分の机の上からなくなつて、向ふ隣り三つの机に分けてあります。

「ああ、昨日は忙がしかつたんだな、」かま猫は、なぜか胸をどきどきさせながら、かすれた声で独りごとしました。

ガタツ。扉(と)が開いて三毛猫がはひつて来ました。

「お早うございます。」かま猫は立って挨拶しましたが、三毛猫はだまって腰かけて、あとはいかにも忙がしさうに帳面を繰ってゐます。ガタン。ピシャン。虎猫がはひって来ました。

「お早うございます。」かま猫は立って挨拶しましたが、虎猫は見向きもしません。

「お早うございます。」三毛猫が云ひました。

「お早う、どうもひどい風だね。」虎猫もすぐ帳面を繰りはじめました。

ガタツ、ピシャーン。白猫が入って来ました。

「お早うございます。」虎猫と三毛猫が一緒に挨拶し

ました。

「いや、お早う、ひどい風だね。」白猫も忙がしさうに仕事にかかりました。その時かま猫は力なく立つてだまつておじぎをしましたが、白猫はまるで知らないふりをしてゐます。

　ガタン、ピシヤリ。

「ふう、ずゐぶんひどい風だね。」事務長の黒猫が入つて来ました。

「お早うございます。」三人はすばやく立つておじぎをしました。かま猫もぼんやり立つて、下を向いたまゝおじぎをしました。

「まるで暴風だね、え〻。」黒猫は、かま猫を見ないで斯(か)う言ひながら、もうすぐ仕事をはじめました。
「さあ、今日は昨日のつづきのアンモニアックの兄弟を調べて回答しなければならん。二番書記、アンモニアック兄弟の中で、南極へ行ったのは誰(たれ)だ。」仕事がはじまりました。かま猫はだまってうつむいてゐました。原簿がないのです。それを何とか云ひたくっても、もう声が出ませんでした。
「パン、ポラリスであります。」虎猫が答へました。
「よろしい、パン、ポラリスを詳述せよ。」と黒猫が云ひます。ああ、これはぼくの仕事だ、原簿、原簿、と

かま猫はまるで泣くやうに思ひました。

「パン、ポラリス、南極探険の帰途、ヤップ島沖にて死亡、遺骸（ゐがい）は水葬せらる。」一番書記の白猫が、かま猫の原簿で読んでゐます。かま猫はもうかなしくて、かなしくて頬（ほほ）のあたりが酸つぱくなり、そこらがきいんと鳴つたりするのをじつとこらへてうつむいて居（を）りました。

　事務所の中は、だんだん忙しく湯の様になつて、仕事はずんずん進みました。みんな、ほんの時々、ちらつとこつちを見るだけで、たゞ一ことも云ひません。

　そしておひるになりました。かま猫は、持つて来た

弁当も喰べず、じつと膝（ひざ）に手を置いてうつむいて居りました。

たうとうひるすぎの一時から、かま猫はしくしく泣きはじめました。そして晩方まで三時間ほど泣いたりやめたりまた泣きだしたりしたのです。

それでもみんなはそんなこと、一向知らないといふやうに面白さうに仕事をしてゐました。

その時です。猫どもは気が付きませんでしたが、事務長のうしろの窓の向ふにいかめしい獅子（しし）の金いろの頭が見えました。

獅子は不審さうに、しばらく中を見てゐましたが、

いきなり戸口を叩いてはひつて来ました。猫どもの愕ろきやうといつたらありません。うろうろうろうろそこらをあるきまはるだけです。かま猫だけが泣くのをやめて、まつすぐに立ちました。

獅子が大きなしつかりした声で云ひました。

「お前たちは何をしてゐるか。そんなことで地理も歴史も要つたはなしでない。やめてしまへ。えい。解散を命ずる」

かうして事務所は廃止になりました。

ぼくは半分獅子に同感です。

底本：「宮沢賢治全集8」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年1月28日第1刷発行
1996（平成8）年5月15日第14刷発行
底本の親本：「新修宮沢賢治全集　第十三巻」筑摩書房
1980（昭和55）年3月15日初版第1刷発行
入力：細川みづ穂
校正：瀬戸さえ子
1999年3月8日公開
2008年10月9日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。